

2つの「社会」と実践知のゆくえ

南出 吉祥

(岐阜大学)

はじめに

「知とモラル」。報告者にとっては壮大に過ぎるテーマであるが、あくまで報告者が日々見聞きしている「若者支援」の現場に即したかたちで、この問題を考えてみたい。本報告で考えてみたいことは、社会から排除されひきこもる若者たちをとりまく状況からうかがえる社会的圧力の実情とその構図、そしてそれに抗する実践のうちにある「モラル」の展開である。そしてまた、こうした現場の実践に向き合う研究において問われてくる「実践／研究」両者の関係（とりわけインフォーマル教育における課題）から、人文・社会科学の果たすべき役割を提起してみたい。

1. 多数派支配により形づくられるモラル

(1) 「周囲のまなざし」というきつき

趣意書にあるように、社会全体を見渡してみると、たしかに「モラルの溶解」と呼ぶにふさわしい事態はいたるところで生じてきているが、他方で、ひきこもり・ニート状態など、社会からの排除を余儀なくされている若者たちをめぐる状況をみると、きわめて強いモラルが機能している状況もうかがえる。そこにはさまざまな内容が位置づけられるが、なかでもいっそう明確なのは、就労に対する義務的要請であり、それを果たしていないためにバッシングの対象とされてしまうという構図である。かつて、「職業意識の未熟さ」としてフリーターが批判されてきたことと同質の問題であるが、そもそもの社会構造・環境条件は脇に置かれ、むしろ焦点は当人の「心構え」に据えられるという問題性である。

そしてこのことは、親も含めた周囲の他者や「世間」のまなざしから意味づけられるばかりではなく、本人自身がそれを強く内面化し自己否定を繰り返していることも少なくない。「働けない」ことにより生じる一次的な困難（お金、生活サイクル、社会的所属…）だけでなく、「働いていない」という状態に対する周囲のまなざしによりもたらされる二次的な困難（周囲に対する引け目、自尊心の毀損、社会関係…）が覆い被さり、困難状況をいっそう苦しくさせていく（そこからの脱却を難しくさせる）という状況がある。こうした「周囲の目」による圧力を「モラル」と呼びうるかどうかは議論の余地があるが、少なくとも当人の意識においては、きわめて強い影響力を及ぼす規範となっていることがうかがえる。

(2) バッシングする側の追い詰められ感

では、そうしたバッシングや周囲のまなざしはなぜ生じてしまうのか。それを読み解いていくと、実はバッシングする側の現状生活に対する苦しさも浮かんでくる。

「同世代の人たちはみんな働いているのに、なぜうちの子だけが働いていないのか？」
「仕事でつらいことはいくらでもあるんだから、一つの失敗だけで凹んでいたらダメだ」

「自分はこんなにつらい仕事にも日々耐えながら頑張っているのに、こいつは働きもせず、ただ飯を食らっているなんて、認めるわけにはいかない！」

『無理して頑張らなくてもいい』ということを知ると、これまで自分を殺して頑張ってきた自分の人生は何だったんだ？」

これは、子どものひきこもりに直面しつつもそれを受け入れがたい親たちの思いを、単純化して言葉にまとめてみたものであるが、内容・構図としては親だけに限られた話ではないだろう。その背景には、バッシングする側の就労・生活上の苦悩が強く働いており、実はひきこもっている若者へのメッセージというよりも、自身の苦悩やストレスに対するはけ口として若者がスケープゴートになっているという構図がある。それは、職場などで生じるさまざまな困難から、一時的にはあれ逃れられている状態に対するある種の「羨望」であるとともに、その裏返しとしての苛立ちが攻撃性となり当人に向けられてしまうのである。そして攻撃する際に、自己（の弱さ・つらさ）が表出してしまうような仕方を回避するために持ち出されるのが、「世間一般（＝社会）」という抽象化された参照軸（常に自分を内側に置く）であり、「多数派」という数の支配により正当化される。それがあたかも「モラル」であるかのように機能して、前述の抑圧構造を生み出しているのである。

こうした状況認識は、「モラルとは何か？」という問いにも連なっていくが、さしあたりそれを規範・道徳・倫理などを含んだ「人びとが生き方の指針としているもの」とするならば、人類の歴史の積み重ねのなかで築いてきたそれとは別種のモラルが、社会統合の手段として用いられつつあると見ることもできるのではないだろうか。

2. 個別具体的な関係のなかで築かれるモラル

とはいえ、上記の「モラル」は為政者側にとっては都合がいいものではあれ、人びとの暮らしにとっては、おしなべて抑圧として機能する。それはバッシングする側・される側を問わないが、とりわけ「秩序」の枠からはみ出した者に対していっそう強く働く。だからこそ、各種支援の活動が展開されているのであるが、その現場には、単に一部の人びとに対する「救済」という側面（いわゆる「支援」の活動）だけでなく、社会全般に広がる「モラル」を解除し、それとは別種のモラルを創造していく契機（オルタナティブの創造）も見出すことができる。一方において、政策的誘導も含めた適応主義の圧力はいっそう強まっている状況下にあるものの、それだけでは現場の問題は解決していかないことは、構造的にも実態的にも明らかであり、社会づくりまで含めた支援実践は徐々に広がりを見せつつある。

本報告では、こうした潮流のなかにある実践の一端を「モラル」という観点から切り取り、その一般化可能性を探ってみたい。その源泉は、同じような状況に置かれた他者との連帯感であったり、立場や属性を超えた交流から生じる「情」の感覚であっ

《シンポジウム》

「知の変容とモラルの溶解——道徳的分断を乗り越えるために」

たり、何か一つのことに皆で取り組む上で自覚化される責任感であったりするが、いずれも抽象化され一般化された「社会＝世間」ではなく、個別具体的な人と人とのかわりによって生成されてくる「社会＝コミュニティ」に即して生じてくるモラルである。

なお、本報告で対比的に描いている二つの「モラル」像は、歴史のなかで積み重ねられてきた人権や社会的正義などに基づくモラルの扱われ方に対しても、問いを投げかけうる。たしかに、社会を維持し発展させていく上で、身に付けるべき規範というものも存在するし、それを関係論的にのみ扱い相対化してしまう愚は避けねばならない。しかし、それら規範を「社会＝コミュニティ（形成）」の次元抜きに「身に付けさせる」ことをしてみても、それはモラルの習得には至らない。これは道徳教育の課題として探究が続けられているが、道徳性の発達には外在的な基準の「当てはめ」では成り立たず、自分（たち）なりの生活に根ざした試行錯誤や「揺らぎ」のなかでこそ掴まれていくものであり、そうした葛藤含みの経験の場・機会の保障こそが、モラル形成において不可欠のものとなる。

近年の「モラル溶解」（あるいは多数派支配のモラル）という状況は、まさしく「社会＝コミュニティ」および「揺らぎ」の棄損に他ならないが、同時に「道徳の教科化」が進められようとしている現在、モラルの「内容」だけでなく、その習得の「方法」にも相応の注意を向けていくことが必要である。